

神の慈しみの家 ヨハネによる福音書 5:1-17

1. さて、エルサレムには、羊の門の近くに、ヘブル語でベテスダと呼ばれる池があって、五つの回廊が付いていた。その中に大ぜいの病人、盲人、足のなえた者、やせ衰えた者たちが伏せっていた。(5:2-3)
 - a. この逸話の舞台は祭りの期間中のエルサレム（1節）、慈しみの家と呼ばれる場所の中のいけにえの羊をささげる門のそばであった。ヨハネはまた5つの回廊があったと記録しているが、5という数字は恵みの数を表しているとも言われる。
 - b. 慈しみの家には多くの病人がいた。彼らは超自然的な救いを求めて来ていたが、彼らの望みはメシヤではなく時たま天使が水をかき回す池まで下りていくことであった。伝説では水がかき回された時に最初に池に入る者はどんな病気でもいやされるとされていた。
2. そこに、三十八年もの間、病気にかかっている人がいた。イエスは彼が伏せっているのを見、それがもう長い間のことなのを知って、彼に言われた。「よくなりたいか。」病人は答えた。「主よ。私には、水がかき回されたとき、池の中に私を入れてくれる人がいません。行きかけると、もうほかの人が先に降りて行くのです。」(5:5-7)
 - a. 病人が奇跡的にいやされるかあるいは静かに死ぬかのホスピスケアのようなこの歴史的な場所で、イエスは38年間病に伏していた男を見つけた。この男は肉体的にだけでなく精神的にも病んでいたようである。彼は誰からも助けてもらえず打ちひしがれていた。
 - b. イエスは彼におもしろい質問をする。「よくなりたいか。」往々にして神が質問をされる時というのは、情報がないからではなく、自分自身を洞察するためである。あなたはここに死ぬために来たのか？よくなるために来たのか？
 - c. この話と今の時代の教会には興味深い共通点がある。
3. イエスは彼に言われた。「起きて、床を取り上げて歩きなさい。」すると、その人はすぐに直って、床を取り上げて歩き出した。ところが、その日は安息日であった。(5:8-9)
 - a. このいやしには多くの疑問がともなう。まず一つには、いやし、あるいは罪の悔い改めと信仰はどのように関わっているのだろうか。後にわかるが（13-14節）、この男は自分をいやしてくださったのはイエスだということさえわかっていない。イエスはその後神殿でこの男を見かけるが、彼の信仰と悔い改めはいやしに先立っていない。たとえ持ったとしてもいやされた後である。
 - b. ただしこのいやしは従うと同時に起こったと思われる。イエスはいやしの言葉をかけ、男はそれに従った。その時男にはジレンマがあったはずだ。まずは体の内に神の力を感じた後もそのまま床に伏していることもできた。次にその日は安息日であったので、規定を破って責められることのないように床をたたまないこともできた。
 - c. 私たちも時として、神に従うのか自分の肉の欲に従うのか、あるいは神に従うのか社会の一般的なルールに従うのか、という選択を迫られることがある。
4. そこでユダヤ人たちは、そのいやされた人に言った。「きょうは安息日だ。床を取り上げてはいけない。」しかし、その人は彼らに答えた。「私を直してくださった方が、『床を取り上げて歩け』と言われたのです。」(5:10-11)
 - a. ここで、イエスに従った男は社会的ルールを破ったのでただちに責められている。これは私たちが神とともに歩む時に払わなければならない代価である。迫害、特に「宗教の専門家」と呼ばれる人たちからの迫害は、あなたの人生に神様が働きかけているサインかもしれない。
 - b. それではなぜイエスはこの男をいやすのを1日待たなかったのだろうか。あと1日待てば多くの論争を防ぐことができたはずである。その答えは17節、19節に出てくる。イエスは、父なる神と同じことを行われる。私たちが同じであるべきである。迫害を受けようとも、人々の歓心を買うために神様に背いてはならない。